

「逝き方から生き方を学ぶ」

今知っておこう 在宅ホスピス

「住み慣れた家で最期まで暮らしたい」「最期まで自分らしく過ごしたい」そんな思いを支える仲間がいます。



福岡県よりごあいさつ

2025年には3人に1人が高齢者という時代を迎えます。平成29年度に実施した「県政モニター調査」によると6割の方が自宅で最期を迎えたいと希望されていました。福岡県としましては、平成19年度から「ふくおか在宅ホスピスを進める会」と共同で、地域ボランティアの育成、在宅ホ

スピスの普及に大きく取り組んでいます。イベントを契機に皆様方の在宅医療に関する関心がさらに深まり、その輪が大きく広がれることを願います。

福岡県保健医療介護部 高齢者地域包括ケア推進課
課長 成松 宏氏



さんと家族だけで決められて、自分の人生が終わることも知らずに病院で白い天井を見て死にました。看

それでも、みんな笑顔なんです。
自分で自分のことを決めていくんです。

ご縁があつて、1991年から訪問看護を始めました。そこにいたのはもう治らんと言われた人や、自

1980年に看護師になり、病院で働いていましたが、3年目に父が亡くなりました。58歳でした。この時代はがんであることを本人に言わないのが当たり前でした。父は自分ががんであり、よくならないことを知らずに死にました。公務員だった父はいつも地域にとつて何が大事なかと一生懸命考えて生きてきた人でした。その父の人生が、自分の知らないところでお医者

看護師の私は病院でたくさんのお患者さん、治療を受けて元気になる人も見てきました。でも、残念ながら治療を受けてもよくなりならず、そのまま病院で亡くなっていく人も見えてきました。人が病院で人生を終えるということはどういうことなんだろう、そんなことを考えた看護師でした。

「最終の人生の終え方
あなたの思い、聞かせてください」

講師 / 在宅ケア移行支援研究所

宇都宮宏子氏

(以下、内容一部抜粋)



オープニング演奏から始まり、基調講演、シンポジウム、ミニ講座、ワークショップ等盛り沢山のプログラムで開催された、「在宅ホスピスフェスタ2019」。実際に患者や家族を看取った経験のある複数の方々への体験談や感想を聞くことで、自分にとっての「人生の最期」は、どうありたいのか。その為の準備はどうするのか。そんな事を改めて考えるきっかけとなった、有意義なイベントとなりました。



分が身体が動かなくなった人から、つらい人たちばかり。それでも、みんな笑顔なんです。自分でも分のことを決めているんです。もちろん一人でも、家族だけでも決められません。そばに一緒に考えようねという看護師さんや、お医者さんや、ケアの人がいたら、ちゃんと自分の人生を自分で決めて生きることがができるんやなあというのを訪問看護で教えてもらいました。

2000年に介護保険制度ができ介護支援専門員(ケアマネジャー)が登場します。介護保険ができたらきつと望む場所でき生きることができるようになるだろうと思っていました。でもあかんかったねえ。何か知らんけど、病院に入院すると帰ってこんですよ、患者さん。病院で何が起きているんだらう。いろんな病院で私を雇ってくれませんか？とまわりましたが、年をとった私を雇ってはくれないので、仕方なく出身校

である白い巨塔の大学病院に降りこみかけたんです。そこで見てきたもの。入院しても治らないという人、患者さんを置き去りで医療者と家族だけで決めています。「一人暮らしだから」とか、「高齢夫婦だから無理じゃないか」と簡単に家に帰ることをあきらめていました。患者さんはどう思ってる？入院してどうなりた？と思う、今頃張っているの？患者さんの思い、誰も聞いていなかった。入院はあくまで通過点です。お家へ帰ろう、生活の場へ帰ろう、そんな取り組みを始めました。

これは、私が大事なことを教えてもらったが患者Aさんのお話です。60歳の男性でした。私たちが会う前に足がしびれて動かなくな



って、色々調べてみたら膀胱にがんが見つかり、病院で抗がん剤などの治療を続けていきましたが、再び足が動かなくなり、家族に説明が入りました。今はがんであることも治療をどうするかも全部本人に言ってもらって決めたのに、もう肝臓にも転移してるし、もう治療も難しいですと

なると、やはり家族の方に説明がいきます。そうすると家族はどう思うでしょう。自分が受けた衝撃以上の辛さを本人に味あわせたくないから言わないでとなる。だからAさんはまたリハビリして歩けるようになるんやと思っただけで、でも本当は違うよな。去年とは違うな。朝起きる度にしびれが広がってるな。便所もわからんな。焦るよな。悔しいよな。その怒りが全部奥さんにぶつけられてい

ました。病院からは、リハビリしようって、転院先を探してくださいと私達に話があったんです。退院支援を進める看護師の私と相談員のソーシャルワーカーは、お医者さんと看護師さんから病状のこと、どんなお話をしているのかなどを聞きま

す。でも、一番大事なことは、Aさんは今の自分の事をどんな風に感じているかです。治療していたドクターに聞くと、実はAさんは画家で、もう一度個展をしたいと、今も頑張っ

て絵を描いてはるんです。それから、「自分のことは自分で決めるからなあ。先生、あかんようになってるんや。私は奥さん、息子さんと一緒に話をしました。お医者さんから聞きま

した。奥さんも息子さんも辛かったねえ。でも、お父さんにとって、これからどんな時間を送ってもらうことが、お父さんの幸せやと思いますか？って聞きました。奥さんは涙を流していました。息子さんは「やっぱり、死ぬまで絵を描きたいん違うかなあ」って言ってくれました。整形外科の先生にちょっとでもリハビリ頑張ったほうがいい？って聞いたら、「いやいや、これ以上骨に影響したら、もっと痛みがでてくるよ」とおっ